雑学書庫 知識の記録

報道は誰のためにあるのか、マスコミの四理論（Four Theories of the Press）

記事のURL

https://www.gklibrarykor.com/ja/article/11593/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

ある国では新聞が政府の許可なしには一行も刷れず、別のある国では政府を鋭く批判する記事が毎日載ります。同じ「報道」という名前でも、その働きと守るべき約束は国や時代によってこれほど違います。いったい報道は誰のために、どんな原則で動くべきなのでしょうか。 この問いに初めて体系的な枠組みを示した本が、1956年に出た『マスコミの四理論（Four Theories of the Press）』です。フレッド・シーバート、セオドア・ピーターソン、ウィルバー・シュラムの三人が共同で書いたこの本は、世界の報道を権威主義、自由主義、社会的責任、ソ連共産主義という四つの理論に分けて説明し、長く比較報道研究の基本書として読まれました。 本記事では、四つの理論がそれぞれ何を信じていたのか、社会的責任理論がどこから生まれたのか、この枠組みが受けた批判と今日へのつながりまで、順に見ていきます。 報道の役割を分ける四つの考え方 権威主義理論と自由主義理論 まず、この二つの理論は「真実は誰が見つけるのか」という問いで分かれます。 (1) 権威主義理論（Authoritarian Theory）ルネサンス後期のヨーロッパで定着した考えで、真実は少数の賢い人が見つけるもので、報道はその人たちが率いる政府を助ける道具だと見ます。そのため印刷には許可と検閲が伴い、支配者を批判すれば処罰されます。 (2) 自由主義理論（L